中国医学と道教（Ⅷ　扶鸞）

吉　元　昭　治

本総会ですでにシャーマニズム、特に、童乩と民間療法（道教医学の流れ）についてのべた。今回は扶鸞との関係についてみることにする。台湾を中心とした民間信仰従事者は、道士（紅頭、烏頭）を最上位として、法師、ついで霊媒としての、童乩、尪姨、扶鸞などがある。シャーマニズムの見地からみると、憑霊（依）型（ポゼション）の最も強いとも思われるのは扶鸞で、脱魂型（エクスタシー）に近いものは童乩で、その中間に尪姨がいる。

台湾のある研究によると、民間信仰の中で籤をひくもののうち、七〇％以上が、運命、事業、疾病に関するもので、また寺廟で、祭祀、祈禱したもののうちの多くは、収驚と安胎であったという。

扶鸞の伝説的歴史は古く、まだ世の開けぬとき、無極瑤地金母が天より神鳥（鸞）をくだし、老子がさらにこれに神霊を与えた。しかし、この神鳥は、天機をもらすことが多かったので、老子が嘴を削り無口にさせた。人々は天意をうかがうことができなくなり、やむをえず、二又状の桃枝を鳥の双翼のように削り、さきに柳枝をつけて嘴とした（観枝、桃枝、鸞筆、柳枝、柳乩などという）。これを神意の降りやすい人物（正鸞）に持たせ、他方をもう一人に支えさせる（副鸞）。こうして神意が降ると、砂盤上に神の言葉を書くようになる。すなわち、いわゆるお筆先きである。また、孔子は諸国遊説で失意にあったとき、一羽の神鳥が、砂の上に嘴で字を書くさまを見て、神意を悟り、これ以後に人々に教えるのに、神鳥の降下を願うと、すぐ来て、神意を伝えたという。そしてその第一の正鸞として子路を命じたという。しかし二人で、観枝を持つことは不都合なので、今では一人で行う。

鸞堂（鸞門）では、三聖恩主といって、関聖帝君（南天文衡聖君）を中心として、孚祐帝君（呂洞賓）、司命真君を祀る。また、文昌帝君、玄天上帝をも加えて、五聖恩主として奉祀することもあり、さらに、太上道祖（老子）、孔夫子（孔子）、観世音菩薩を上座に併祀する場合もある。

扶鸞の歴史として確実なのは、福建省泉州の公善社とされる。澎湖島には、馬公に、善勧社（一九八六年）がうまれ、文衡聖帝と、慈済真君を祭祀した。ついで一新社となって、多くの阿片患者を救った。さらに楽善堂ができ、『覚悟選新』という、善書が作られたが、鸞文がしるされた最初のものという。こうして、現在まで、全台湾で、鸞堂は五〇〇以上となり、その善書の発行は三～四〇〇種以上、定期刊行の善書は十余種におよび、その盛況がうかがわれる。

扶鸞とは、神意が正鸞に降下し、鸞筆が動いて、鸞文となるが、その神意を読み取る判読係、それを記録する記録係、さらにその誤ちを正し、一個の鸞文とする校正係などがいるわけであるが、これら鸞生は、経験があり、相当の教養、文章理解力がないと、あれほどの鸞文にはならないと思う。たんに民間信仰といって片付けられないものがある。

この扶鸞で、降下する神仏は、文字通りの多神教的なもので、ある鸞堂発行の定期刊行善書の一〇〇～一三五号のあいだを、試みにみると次のような神仏が顔を出している。民間信仰的なものとして、無極瑤地金母、麻姑、阿仙、李八百仙翁、織女仙姑、九天玄女、天上聖母、中壇元師、北海老人、保生大帝など。道教的なものとして、関帝、純陽祖師、張天師、中元地官大帝、荘周仙翁、南極仙翁、南嶽大帝、張果老仙翁、太上道祖、南華帝君、東嶽大帝、邱長春仙翁など。仏教的なものとして、観世音菩薩、普賢菩薩、済公活仏、弥勒古仏、南海古仏、玄奘法師、達磨祖師、冥府王殿閻王、龍樹大士、白衣大士、阿難尊者、地蔵王菩薩など、儒教的なものとしては、孔子、文昌帝君、朱熹、王陽明など。その他歴史上の人物として、華陀、延平群王、広成子、彭祖などがある。なお特異なのは、キリスト、マホメットも降りていることで、世界の人々は、顔や着るものが違っていてもそのルーツは同じだから、人間としての真理も同一なはずであると、五教同一的な見解も示している。

扶鸞は、関帝を主神とするから、道教の一派（占験、積善派）ではあるが、他方、文昌帝君が乩筆を初めたといういいつたえもあり、その説くところは、忠、孝、信、義、礼、仁、智など儒教的内容でもあり、儒宗神教または

聖教などともいわれている。

以上の諸点をもととして、今回は、鸞堂における状況、その内容についての具体的な経験をふまえて報告し、鸞文からみる民間療法の一端を発表する。

（順天堂大学産婦人科）

安藤昌益の臨床医学と『万病回春』

和田耕作

江戸中期の特異な思想家安藤昌益（一七〇三～一七六二）は、稿本『自然真営道』百巻のうち、五十八巻から百巻までを、医学論に費していたが、そのすべては関東大震災によって灰燼に帰してしまった。

その医学論を復原する関連資料としては、『進退小録』『自然精道門』『神医天真論』（以上、『安藤昌益全集』第十四巻に収録）、『真斎謾筆』（『安藤昌益全集』第十五巻に収録）などがある。なかでも浩瀚な書物である『真斎謾筆』は、昌益の臨床医学の全貌をうかがうことのできる貴重な資料である。

では、昌益の臨床医学はいかにして成立したのであろうか。このたび、『真斎謾筆』と『万病回春』を比較検討した結果、『万病回春』が昌益医学の成立に大きく関わって